

谷口一献

たにくち・いっこん

句集

福

ふくわらい

笑

透き通る蛇しか脱げぬ蛇の衣

さて世の中には「俳句を選ぶ人」と

「俳句に選ばれる人」がある。

彼が俳句に選ばれた人だと確信したのはこの作品。

この句一つで彼は俳句に選ばれた人に。

— 山田六甲（「序」より）

熱
爛
に
酔
へ
ば
ま
た
そ
の
話
か
な

ラ
ッ
プ
の
端^は
ま
だ
見
つ
か
ら
ぬ
秋
夕
焼

初御籤みくじ誰にも見せずしまひけり

日脚伸ぶ父の忌近うなりにけり

夏蝶や既視感のあり見失ふ

片頬に火照り残るや盆踊

盆踊一寸踊つて帰りけり

秋の湖天のうろこが落ちてをり

古の月は闇夜の底深く

相生万葉岬 二句

満月や早く人間になりたい

屁放虫いつも後ろに誰か居る

酌み交はす銀杏の殻剥きながら

噫して乾杯の酒溢しけり

立杭の窯から窯へ秋晴るる

捨つるもの申し訳ほど去年今年

のぞき合ひ大笑ひせし初御籤

けふもまた同じ顔ぶれ初句会

啓蟄は悪魔のゴング虫嫌ひ

春愁や紙の表裏を迷ひけり

大橋の果てまで霞みさはら舟

野仏は半眼にして春半ば

酔ひほのとふと桜餅妻に買ふ

熟考の嘘つき忘れ四月馬鹿

欠伸してぐらりと歪む新樹かな

薔薇の香の密やかにして魔性かな

十葉の花付けしまま干してあり

父の日の仏壇に酒^{さき}注ぎにけり

特別作品から 十五句

申年の還暦に酌む年酒かな

年酒酌むともにしらがの二人かな

獅子舞の動きに釣られ酔ひにけり

残り花愛でに酒好き揃ひけり

花冷の百葉の長効いて来し

目刺焼く妻に一献すすめけり

独り酒好みし父の切子かな

蚕豆に箸定まらぬ酔ひ深し

昼麦酒内緒の音を聞かれけり

短夜に深酒をしてしまひけり

盆花に大吟醸添へ母迎ふ

新走遠き目をして唼きにけり

杜氏来て酒造り唄聞こえぬる

酒の味戻りて風邪も完治せり

爛酒は嫌ひでもなし二人とも

採るものの居ぬ淋しさや枇杷熟るる

枇杷剥くや綺羅に剥けしことのなく

水馬の水遁の術気に喰はぬ

浴衣の娘中国訛り気にならず

通常の異常気象や秋に入る

蓑虫の糸垂れてゐて払はるる

流れ星この世の刻を止めにけり

涼
新
た
古
自^{オル}
鳴^ゴ
琴^ル
仕
舞
ひ
け
り

著者略歴

谷口一猷 (たにぐち・いっこん) (本名・谷口晃)

昭和31年 神戸市生まれ。
兵庫県下の大学卒業後、西宮市の酒造会社、大阪の共同仕入機構を経て、現在は公益財団法人で兵庫県下対象に福祉事業に携わる。

平成8年 「さきがけ旬会」発足時に入会、梅本豹太の指導を受ける。

平成26年 「六花」入会。
山田六甲に師事。

平成31年 「六花」同人。

俳人協会会員

句集 福笑

2024年2月20日 発行

定 価：2860円(本体2600円)⑩

著 者 谷口 一猷

発行者 奥田 洋子

発行所 本阿弥書店

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 〒101-0064

電話 03(3294)7068(代) 振替 00100-5-164430

印刷・製本 三和印刷(株)

ISBN 978-4-7768-1668-3 (3384) Printed in Japan

©Taniguchi Ikkon 2024